

## 第30回国際会議レポート

### 「いつも誰かのために、いつか誰かのために」

### —共に生きる世界と私—



第30回IC国際会議は6月15日(金)から17日(日)まで三浦海岸のマホロバマインズ・ホテルにて開催されました。「いつも誰かのために、いつか誰かのために」—共に生きる世界と私—のテーマのもとに“世界”のみんなと共に助け合い支え合って生きているという実感が会議全体にみなぎるような話し合いとなりました。3日間を通じて、約80名の方々が日本各地はもとより、インドネシア、韓

国、カンボジア、台湾、中国、ベトナム、など計10ヶ国/地域から集まりました。小中学生から年輩の方々まで参加者は皆親密にふれあい、また国や宗教の違いをこえた自由な話し合いを通じて、「いつも誰かのために、いつか誰かのために」何が出来るだろうかと考え、明日への新しい勇気を貰い、次への一步を踏み出すきっかけを得たことでしょう。

#### ■主な内容

◇IC国際会議レポート・1-13

◇ICニュース・16

◇学校訪問等のレポート・14-15

## “心を開いて話し合おう”



開会式は国際 IC 日本協会の橋本 徹会長のメッセージで始まりました。「世界を見渡すとイラクの紛争、日本と中国の関係、日本と韓国との関係など難しい問題があります。まだまだ心よりの和解とは言えません。家庭の中にも不和があり、また日本では3万人もの人々が毎年自らの命を絶つという現実があります。

これを変えるには、まず自分が変わることから始めましょう。いつも誰かのために、いつか誰かのために役立つような自分に変わろう、それが平和につながっていくでしょう。3日間この出会いを大切に心を開いて話し合うことから始めましょう」。全体会議では各スピーカーの体験談に耳を傾けました。



### 愛の心で共に生きる

—韓国の青少年への取り組み—

### チャ・クワンソン

(車光善、韓国 MRA/IC 協会事務局長)

私は、1963年高等学校2年生のとき、親しい友人の勧めでMRA/IC 高等学生部の集会に出席したことがきっかけでMRA/ICが何かを知り、MRA（道徳再武装運動）の精神に合った正しい生活をしなければならないと決意しました。その後、大学に入学し、大学内にMRA/ICチームを組織し、Sing-Out合唱団を作って、毎年夏休みと冬休みに主要都市と学校を巡ってSing-Out公演を行い、学生らと討論を通じてMRA/ICの生き方に対する意見を交わしました。私が大学でMRA/IC活動を行っていた

ときは、韓国の主要大学のほとんど全てがMRA/ICチームを組織し、連合の形で大学生の活動に参加していたときでした。

私がMRA/IC活動と青少年運動を通じて感じ取ったのは、この世の中は一人では生きていけないという事実です。人間は、好きであろうが嫌いであろうが、常に他の人間と関係を持って生きていかなければならないのですが、正直・純潔・無私・愛というMRA/IC精神の実践で私自身がまず変わり、友人との関係や家庭の雰囲気を変え、社会や国家を

正しい方向へ発展させ、世界に平和と繁栄がもたらされなければならないと考えています。私たちの社会は、生活の過程や自分の人格を重要視するというよりは達成した結果や成果のみで成功か失敗かを判断・評価するのが一般的ですが、MRA/ICは、日々の生活と暮らしていく過程こそが重要とみなしており、私も、周囲に配慮し共に生きる愛の心で人生を生きていかなければならないと思っています。

韓国では、中学生・高校生・大学生のような青少年を主体とした活動を強化しており、各学校ではMRA/IC部を組織し指導教師の指導を受け、MRA/ICの生活方法に親しみ、活動するのが他の国とは異なる点だと言えるでしょう。

来年からは、小学4・5・6年生の児童にまで範囲を広げ、低年齢層から正直・純潔・無私・愛の精神を実践し、自分自身を反省できるような青少年を育成する計画を立てています。中・高校生と大学生は主に学校単位で活動することを勧めており、特別な場合にはいくつかの学校が連合の形で大きな規模の集会を持つことがあります。今年も、7月25日から28日まで3泊4日で青少年道徳性実践MRA/IC訓練大会を「私が変われば、隣人も変わり、人類が幸せに過ごせる」というテーマで全国の中・高

校生約500人と指導者と大学生100人、合わせて約600人のMRA/IC会員が集まり、MRA/IC精神での生き方に親しみ、実践に移す姿勢を学ぶ計画です。

韓国MRA/ICは、今までのMRA/IC国内外の活動と、国民と青少年に対する功績を評価されて最優秀団体に選ばれ、去る5月2日に大統領から表彰されました。わが国には青少年関連団体が350余りありますが、全ての団体を代表してMRA/IC韓国本部が受賞したことになります。

韓国と日本は、歴史的にも文化的にも長い間関係を持ってきましたが、時には友好的な協力関係を維持し、また時には問題を抱え互いに誤解し、誹謗するときもありましたが、1960年以降、MRA/IC精神が私たち両国の指導者と青少年に影響を与え、韓・日両国だけでなく、国際的な場において友好関係を協力関係に発展させ、問題発生の際に静聴と考えを分かち合うことを通じて取り除き、問題に対して答えを出してきました。

今回のIC国際大会が、韓国と日本がMRA/IC精神とその実践を通じて、両国のみならず国際的にも世界の平和と人類の繁栄に大きく寄与する集まりとなることを心より願います。

## 中国の将来に向けての役割



### リュウ・レンジョー

(劉仁州、台湾家庭EQ協会理事長)

テーマの“共に生きる”ということについて考えてみました。私はMRA(現IC)に出会う前は、世界の動きについて全く知りませんでした。いつかは台湾から出たいと思っていましたが、MRAに出会い、さらにMRAで2年間トレーニングを終えた後の妻と出会いました。彼女が私に世界を運んでくれました。

1985年に日本のIC国際会議に参加しました。3分間スピーチするように依頼され、3時間かけてスピーチを準備しましたが、最初の一文を読んだとこ

ろ、日本人の通訳は私の英語が分からないと言いました。3回も言い直しましたが、分かってもらえず、とうとうその通訳は私の原稿を見て訳すというありさまでした。その後、ワシントンに渡り国際会議に出席しました。妻のグレースが通訳してくれると思っていると、グレースも理解できず、二人で途方に暮れ、終には、国際会議そっちのけで大喧嘩をしてみました。その後グレースからオーストラリアの研修コースに行くように提案があり、やっと英語をなんとか話せるようになりました。

「MRAに出会って私の生活も変わりました。劉先生という年配のご夫妻に出会いました。二人は持っている物も時間もお金も若者を育てるために使っていました。私に静かな時間の持ち方を教えてくれました。いつも静かな時間を持つと、この二人の姿が浮かびます。23年前、妻のグレースと私はこのようにしてこの仕事に専従として働くことを決めました。そしてICアジア・太平洋青年会議（APYC）、選挙浄化キャンペーン、アクション・フォー・ライフ（Action for Life、IC国際青年訓練プログラム）、家庭トレーニングコース等を次々に始めてきました。そして今、特に中国の将来に向けて私たちの人

生を捧げています。過去2年間、上海と南京、その他の主要都市を毎年訪問し、政府関係者、NGO、学校等を訪問したり、また友人の家庭を訪問したり、ワークショップで話をしたりしています。私は将来の中国の国家形成にとってMRA/ICが大きな影響を持ち得ると確信しています。そして日本と韓国の協力がとても重要だと感じています。Action for Lifeのメンバーたちも毎年中国へ行っています。将来はAction for Lifeを通じて若い中国人を世界のために働けるようにトレーニングしたいと思っています。

2日目の朝は、まずファミリーグループのメンバー同士で集まり「静かな時間」を持ち、お互いの気持ちを分かち合う時を持ちました。全体会議では、ICとの出会いで自分の生き方を変えた佐谷さんの体験や、在日コリアンのソン・ホチョルさんの想い、そして、グレース・リュウさんの家庭でのチェンジの様子が話されました。



## 私の生き方を変えた出会い

**佐谷 隆一**

(元全東芝労働組合連合会議長)

私は現在のICの前身であるMRAの世界会議場であるスイス・コーでの会議に参加したことにより私の生き方を変えました。その出会いから今日までのことをお話します。

スイス・コーへは3回訪問しました。1回目は今から30年前35歳の時でした。当時は東芝労働組合支部の書記長を務めている時でした。初めてのコーへの会議への参加は不安と戸惑いでした。しかし会場へ入った時、各国の皆さんが温かく迎えて下さり感激しました。皆さんとの討論や食事の時間などのお話で「先ず自分が変わるから始めよう」と気づきました。

2回目は15年後でした。その時は労働組合の責任者として、自分達の生活条件が良くなることだけでなく、もっと地域を明るくすることや、将来を担

う子供達のために、多くの組合員の仲間と行動しようと呼びかけた体験を話しました。

地域の子供達と音楽愛好の仲間と1000人でラベル作曲の「ポレロ」の演奏会をしたり、工場の周りを「花いっぱい」にしようという試み、また父親と子供の山登り「夜行軍」など、家族の対話や地域を明るくする為、自分達が出来ることから始めようと行動を起こしました。これらの行動は発展しながら、いまでも後輩たちが受け継いでいます。

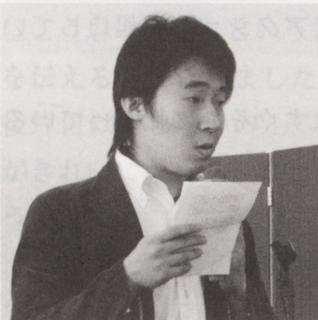
3回目は、7年前の会社の定年退職を記念したヨーロッパ旅行の時でした。長野専務理事に温かくお迎え頂き、韓国の学生さんと昼食をさせて頂きました。

そして今、私はNPO法人「JHP学校をつくる会」の運動に理事の一人として参加し12年になりま

す。1990年の湾岸危機に際して結集したシルバーパワーを、今は大学生を中心に「出来ることからやろう」を合言葉に「カンボジアに学校づくり」をしています。今年で小学校校舎180校を建設プレゼントしました。

カンボジアはポルポト政権時代に全てを徹底的に破壊され国の将来を担う子供達の教育の場、校舎が足りません。そこで私たちが立ち上がり、皆さんから寄付を頂き、学校建設をしています。

建設現場には、日本から毎年50名の学生が1ヵ月滞在し、一緒に汗を流します。私も東芝の青年と11回カンボジアを訪問し、学校づくりを体験しました。参加した青年たちは、カンボジアの子供達の笑顔いっぱいの喜びに感激し、成長する自分を発見したことに感謝しています。今度は、きれいな水「井戸」を掘りに、今年もカンボジアを訪問します。私の今があるのは、この「IC」への参加から始まりました。ありがとうございます。



## 在日コリアンの視点で見た日本社会

**ソン・ホチョル**

(中央大学法科大学院3年)

昨年の秋だったと思いますが、当時、大学受験を控えていた私の弟と、都内の書店に受験の参考書を買に行った時の話です。私が弟と本を選んでいる時に、隣の高校生2人が何やら同じく参考書を見ていました。そのうちの1人がやたらとこれが良い、あれが良いなどと言っていると、もう1人の高校生が「なんで、そんなに良い本が分かるの?」と尋ねました。そうすると、尋ねられた彼は、その全ての情報はインターネット上の巨大掲示板から入手した情報であると自慢げに話していました。私は彼の全ては知りませんが、少し恐ろしい気持ちになってしまったのは事実でありました。というのも、彼のような高校生が、情報の信憑性も確かめずに、真実であるかのようにまことしやかに話していることに対する、情報についての判断能力の欠如を恐れたからです。

現代は、テレビ、新聞、ラジオなどのマスメディアをはじめ、さらにはインターネットによって洪水のような情報量が巷に流れているのは、周知の事実であります。のみならず、最近では無料で配布される雑誌も数多く現れ、私たち情報の受け手は、この洪水のような情報量の中で何を選ぶか、いや選ぶべきかの選択を常日頃、絶え間なく迫られている状況にあると言えます。これが幸か不幸か、結論は容易

に付け難いですが、1つ肝に銘じなければならないことは、情報が氾濫している状況に対して、私たちは全てを知っているかのような錯覚に捕われてはいけないということです。

犯罪報道に関して言えば、その人が有罪であることが当然であるかのように、連日のごとく実名と顔写真を載せて、過去のプライバシーまで平気で暴露しています。そして、それは瞬時に日本、いや世界中に向けて発信され、シェアされます。私は、別に容疑者に対して擁護する気はさらさらありません。ですが、報道される内容がすべて真実のように流れ、それをすべて鵜呑みにしながら次々と仮定に仮定が積み重ねられる社会の風潮が如何なるものかと思っています。それは、私の祖国である北朝鮮に関する報道も似たようなことが言えると思います。そして、このような風潮は、時に相互に誤解や偏見を生み、ナショナリズムを煽り、無用な紛争を生み出します。

情報は知識ではありません。情報は、所詮は情報です。経験に基づく確かなる知恵と体系的な知識が備わっていれば、情報を適格に処理できると言えるでしょう。そのためには、やはり多くの人と出会い、互いの心を開きあったフェイス・トゥ・フェイスの会話が必要なのではないでしょうか。そういう

意味では、この国際会議はまたとない絶好の機会です。ありますし、みなさまも普段思っていること、もしくは偏見でも構いませんが、それを相手の気持ちにも配慮しながらぶつけてみてください。そうすれば、経験に基づく確かなる知恵が1つ増えてきますし、わだかまりがあればそれも少しずつ解けていくことでしょう。

最後に、私の印象に残った好きな言葉がありますので、1つ紹介します。「人は賢いから尊敬されるのではない。その知恵を他人のために使ってこそ、初めて人から尊敬されるのである。そして、他人のために何かしようとする人には、その能力がある。なぜならば、人のために何かをしようと思ったのであるのだから。それは、他人のために何かしよう

と思った人の責任でもある」。

IC にいて、「自分をチェンジしたとしても、その先、何をすればよいか分からない」と考えていらっしゃる方もいると思いますが、私は、在日朝鮮人として名を名乗り、法律家となって考えることで、同じ在日コリアンの子供達に日本の社会で生きる勇気を与えられると思っておりまして、現に小規模ですが学習塾を開いて、自ら培った受験のスキルを活かしながら、他方で生徒達に IC の理念を浸透させています。みなさんも自分の出来る範囲で良いですから、何が正しいかを考えてアクションを起こしていただけると幸いです。

案外、自分にできることはすぐそこに転がっているかもしれませんよ。

めに、  
誰かのために』  
世界と私—  
the World and I



## 家庭を守る知恵と秘訣

—ファミリー・ワークショップの試み—

## グレース・リュウ

(台湾、台湾家庭 EQ 協会理事)

中国では伝統的に、一家の主にすべての決定権があります。妻は夫に従い、子供達も同じように従います。しかし、最近の台湾では事情が違って来ようです。今では妻は夫と同じように家の中での役割を果たします。その上多くの家庭では妻の役割の方が夫より重要になってきています。

私が結婚した時、妻は自分の夫をより良い人にする役割があることを知りました。でもそれは一体どういう意味でしょう。それは自分の夫を自分好みの人間に変えようとするということなのでしょうか？それともその人があるべき姿になるように助けることなのでしょうか？

私は夫と結婚する前に、たった一度しか会っていませんでした。なぜなら二人には共通の確信があったからです。けれど結婚してすぐに私達の性格があまりにも違っていることに気づきました。ほとんどすべてのことが口論やけんかの原因となりました。私達は二人とも教師としての訓練を受けていましたし、その上それぞれの実家では長男であり長女でし

たので、お互いの行動を指図したがりました。

例えば私は、きれい好きで家の中を常に整理整頓しておきたかったのですが、夫はそこら中に物を散らかしました。夫は人のことを揶揄したり冗談を言って楽しませることが好きですが、私はとてつもなく真面目で自分のことを冗談まじりに言われるのを受け入れられませんでした。すべての口論の発端はとてつもなく小さなことから始まるのですが、議論しているうちにお互いの性格を傷つけ合い、結果的に大きな溝が出来てしまいます。

そんな時、私は結婚前に「静かな時間」を持って心の声を聞くことを学んでいて本当に良かったと思っています。夫との口論による溝を埋めるために、次の朝十分な時間を取って自分の感じる事を書き留めます。それから夫に向かって話すのです。このやり方が夫の隠れた才能を引き出し、彼があるべき人となる助けとなったのです。

私には2人の子供がいます。24歳の娘と22歳の息子です。娘は高校から大学卒業までの8年間

家を離れていました。去年彼女が家へ戻ってきた時、急に私達は毎日顔を合わせて暮らすという現実に向き合いました。

娘は私にそっくりで、すぐに反応して感情に表れます。キッチンでのやり方や洗濯の仕方でもすぐに軌轢が起きました。今年になってようやく私のやり方が正しい訳ではないことに気づきました。私は娘を認めて、娘のやり方に従うことを学びました。でも話し合うことは続けなければならないのですが、その際に“あなたはこうするべき”ではなく“私はこう思うの…”という言い方に変えて自分の気持ちを伝えることにしました。例えば、“あなたはなぜ後片付けをしないの!”と言うよりは、“キッチンがきれいになっているとお母さんは嬉しいわ”と言うように。

息子はとてもものんびりしています。勉強についてもそうで、あまり良い成績ではありませんでした。彼はテレビゲームが大好きで、ほとんどの時間をそれに費やしていました。ですから彼に私の考えを押し付けず彼の本当の人生を見つけるように導くには、とても忍耐がいることでした。しかし私は決して彼を急がせたり、また彼に向かって押し付けたりするような事をしませんでした。私達が黙って我慢

した事が幸いしたと思いますが、息子は徐々に勉強が必要であるということ、そして自分の人生は自分で作りあげなくてはいけないということに気づいたのです。昨年から大学生活を終えるまで、本当に良く勉強に励み、クラスで3番にまでなりました。今月大学を卒業しますが、既にはっきりとした人生の目標を持っています。

家庭は社会の核となるものです。すべての家庭がうまく機能していく知恵と秘訣を備えたならば、きっと社会も良くなるでしょう。夫と私は多くの人々が子育ての方法について、深い理解を得、習熟できるように助け、また心の奥深くにある声を聴く訓練をする機会を持つファミリー・ワークショップに多くの時間と情熱を傾けています。それにより多くの家族が自分達の抱える問題や家族関係について、うまく処理する力と方法を学び、その結果、彼らは問題から抜け出すことができます。私達はそのように訓練された人達が自身の経験を他の人々に伝えることで、多くの家庭の求めに応じ、ワークショップを続けていけるように力を注いでいきます。これからは台湾のみならず、香港や中国へ、この経験を伝えていきたいと思っています。



スリランカのカピラさんと共に  
(右から) リュウ夫人グレースさん、リュウ・レンジョー氏、カピラさん、リュウ夫妻の愛娘シャオユンさん

## 岡本家の家憲

岡本家 父 岡本 郁生  
 母 岡本さくら  
 娘 岡本あんな (中学生)  
 息子 岡本 健 (小学生)

1. あいさつする
2. 命を大切にする
3. 嘘をつかない
4. 誰が正しいかではなく、何が正しいか考える
5. 人を思いやる気持を忘れない



(左から) 母、娘、父、息子

家族4人でIC国際会議に参加して、自分達の家族の行動指針が必要と感じて話し合った末、出来上がったのが「岡本家の家憲」です。

これを冷蔵庫に貼っています。紙に書いて見るところに貼っておくことは良いことだと思います。父「それぞれの国、それぞれの個人にさまざまな意見があると思います。それを調整しようとか、まとめようとする前に、まずは自分の思っていることを出し合うということが大切だと改めて思いました」。

母「この家憲を作ることで家庭の中のいろいろな事を見直すきっかけとなりました。今回の国際会議に子供と一緒に参加して、子供達が初めて会った海外の方たちや日本の方たちと交流していた姿が印象に残りました」。

小学生の息子「それぞれの国の人が違う考えなので面白いと思った」。

### 大人に不満だったこと

中学1年 岡本 あんな

私は中学校に入ってなにかと不満でした。「ゴミや放置自転車があつて町の中が歩きにくい」、「お母さんがテレビを見せてくれない」、「大人は自分勝手」・・・などがありました。

そのなかで一番不満だったことは「大人は自分勝手」ということです。

最近、社会保険庁の年金問題や税金のムダづかいが報道されています。それを見て大人の方は「あの国会議員は無責任だ」と言っている映像が流れています。それが許せませんでした。だって投票して国会議員を選んでいるのは、その大人たちだからです。私から見て大人が一番の無責任だと思いました。

でも2007年の国際会議に参加して、ICには自分が思っていたよりも「よい大人」がたくさんいることを知りました。みんなが「よい世界」を作ろうとしていました。

私は、「大人は自分勝手」という考えを改めました。

なぜなら、赤字を黒字だとウソをついていた人を支持していた人、簡単に人を殺してしまえるような世界を作りあげてしまった大人自身が、子供たちよりも苦しんでいるのではないかと思ったからです。

大人が嫌いだったときは、失礼なことを言ってしまいました。でも、ICの人が私を「まだ中学生だから・・・」と軽視をしなかったこと、話しかけてくれたことがとても嬉しかったです。そして、日本語が通じない人と英語で話してみることも、とても新鮮で楽しかったです。

通訳の方とお話できたことも、印象に残っています。

国際会議に出席して、はじめに書いた不満も自分のなかで「解決」できました。それに、今では「世界中の人們が困っていることに比べれば、たいしたことないかな」とも思っています。

## カンボジアとベトナムの和解

ビリヤ・ドック (カンボジア、中学英語教師)

2004年にカンボジアで開かれたICアジア太平洋青年会議(APYC)で一人のカンボジア人の女の子がベトナム人に抱いていた感情を正直に伝えました。それは「私にはベトナムの人達を愛することは難しい」ということでした。するとベトナムの人達はとてもショックが大きく、家へ帰りたと言い出しました。年配のICの方々が一緒に話し合うように図ってくれて何とか心を静めることができました。2つのチームは、話し合いの機会を作りましたがまだ充分ではありませんでした。そこでカンボジアとベトナムの和解について考えることになり、カンボジア-ベトナム・ダイアログ(The Cambodia-Vietnam Dialogue、略称CVD)が生まれたのです。目標は次の2つです。

1. 2つのチームの間に信頼と友情を高める
2. 偏見をなくす

2006年の初頭、カンボジアでベトナムのICのメンバーと会いました。彼らは第3回のCVDの準備のためにカンボジアにやってきたのでした。その時はまだよく話ができませんでした。次にインドネシアの大会(第12回APYC)で彼らに会いました。まだ親しみを感じませんでした。その後ベトナムで開かれた第3回CVDに参加して、カンボジア側の準備委員会の一員となりました。

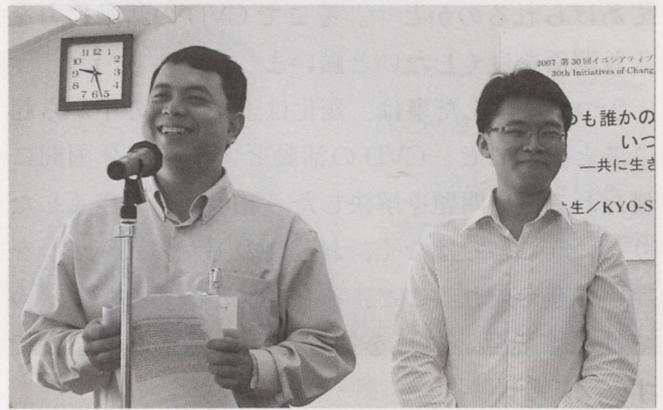
昨年12月、6日間のトレーニングコースに参加しました。これはベトナム人の友人についてもっと

## 互いの偏見をなくすために

ツロン・グエン (ベトナム、会社員)

私がCVDの活動から学んだ2つの点についてお話しします。

まず初めにCVDでの活動は、私にとってとても重要なことになったのです。今までは自分のこれからの仕事やお金など自分の私生活のことしか考えて



(左から) お互いの体験を語るカンボジアのドックさんとベトナムのグエンさん

良く知るチャンスとなりました。1週間滞在した後、少し親しみが増した気がしました。そして2月の会で9日間一緒に過ごしました。

一般的にカンボジアの人々はとても大人しく、番犬として犬を大切にしています。我々カンボジア人のチームは、ベトナム人に対して、大声でしゃべるとか、犬の肉を食べるとかの偏見をもっていました。でも一緒に過ごしていろいろと話し合ってみると、私達がベトナム人に対して持っていた偏見は間違っていたことに気づきました。なぜなら、それぞれの国には固有の文化があり、それぞれの個性と価値があるということです。大きな声も犬を食べることも、それはベトナムの文化なのです。

そして自分の中に変化を見出しました。もうベトナム人に対する偏見はなくなり、それよりも2つのチームのこれからの発展性について考えるようになりました。2つのコミュニティーの間でトレーニングを通して一緒に生き、行動しようということです。この機会を借りて、ベトナムの友人に今まで彼らに対して偏見を持っていたことについて謝りたいと思います。

いませんでした。なぜ会ったこともない人のことまで考えなければならないのか分かりませんでした。問題が起きたのは自分のせいではないのに…と。

しかしCVDの第1回の会合の時、カンボジアから来た青年が「ベトナム人に毒を盛られるかもしれないから、あまり食べない方がよい」と言うのを聞いて、とても傷つきました。そして考え始めました。どうやったらベトナム人を好きになってもらえるか、またカンボジア人の中にある憎しみを理解し

てあげられるのかと…。そこでCVDの活動に力を入れ関係を良くしたいと願いました。

2つ目に学んだ事は、変化はまず自分の中から起こるということ。CVDの活動というのは2国間に横たわる歴史問題を解決したり政治関係を良くしたりということではなく、お互いの国々の人々が心を開いて迎え入れること、そして何か決めてかかるのではなくて互いに耳を傾け合うということなのです。

ある編集者から聞いた話ですが、ある高名な仏教の僧侶が、多くの本を出版して人気も高かったので

すが、彼は決して自分がベトナム人であることを告げなかったそうです。それはカンボジア人の偏見を恐れたからだということです。結果は、多くのカンボジア人にその本は愛されました。私は、問題は外からではなく内からやってくるものだと思います。自分がいつも正しいと思っていると心を充分に開くことが出来ません。私達は如何に自分達の心を自由にするか、そして広く心を開くかを学んでいます。偏見をさえ受けとめられるように。憎しみが取り去られ、愛があふれた時、良い方に向けて変化してけるのです。

\*

今回は3日間を通じてファミリーグループとディスカッショングループという2つのグループに分かれて話し合いが持たれました。

ファミリーグループでは5～6人の小グループでお互いを良く知り合い学べるように、朝一番での30分間の集まりをはじめとして3日間で4回の集まりが持たれました。家族のような親密さと安心感の中で、体験を通じての深い話し合いができたことは、この会議での大きな成果と言えましょう。

ディスカッショングループでは10人程度の少し大きなグループで「国際」「社会」「家庭」という3つのテーマのもとに各1時間30分づつ2回話し合われました。そして会議の最終日に各グループが話し合いの報告を行いました。



ディスカッションの様子



報告の様子

## 閉会式での参加者の話

チェ・ヒジン（韓国） 高橋ファミリーとなって

韓国の大学4年生です。昨年1年間、ワーキングホリデーで日本に来ました。最初アルバイトをしながら日本語を覚えようと一所懸命働きましたが、そこでは日本語も覚えられず、つらい目に遭い、うまく行きませんでした。そんな時、韓中日学生フォーラムでお会いした長野さんに再会し、それがきっかけでICインターンとしてお手伝いすることになりました。そして高橋家にホームステイするようになり、夜遅くまで高橋さんのお父さんお母さんと話し合ったりするうちに、人としての役割、家族としての責任、娘としての責任やこれから人としてどう生きていったらいいかを学びました。今では高橋ファミリーの一員となり、お父さんお母さんを大切に思っています。



閉会式でお話しするヒジンさん（中央）と高橋夫妻



リム牧師

## リム・スンキ（韓国）

久しぶりに日本を訪問し皆様にお会いできて嬉しいです。いろいろな国の人々を前にして発言させて頂きありがとうございます。このように3日間、隣国の方々と話合えて嬉しく思いました。ここに集まれた方々がこれからも協力し合って平和に暮らすことができると思います。個人的にもいろいろな方々と良いお話ができて、つながりができ嬉しいです。今日、世界の中にはまだまだ紛争がたくさんあります。私達の国でも北朝鮮との分断をなくすために「和解の家」を建てたいと思って活動しています。2007年10月21日から世界和解大会を開催します。日本の皆さんや他の国々の方々も是非ご参加下さい。多数の友人を連れていらして下さい。

## 高柳 静江

私が主催しているセミナーの話です。16歳の子供が自殺願望があり母親とうまくいきませんでした。子供は日本がダメならカナダがあるということでカナダへ向かいました。頑張っています。日本では生き難い子もカナダでは大丈夫、母親もやっと納得しました。ここで学んだことは、許すことが子を救うことになったことです。ICの生き方、人を育てることとは、生きることの原点です。

## 鈴木 恒美

小学2年生の担任をしています。1年生の時、暴力が激しく、すぐ喧嘩が起き学級崩壊を起こしていました。その中で一人の子供が変わっていったのです。その子の母親は衣食住がきちんとはできないのです。家庭へ行ってみると、母親が掃除をしない、食事を作らない、洗濯をしない。家の中はゴミ屋敷です。でも子供は親の割にしっかりしていてとても可愛いのです。ところが“死ね”“ウザイ”を連発して落ち着かず、暴力に走る、心のコントロールのきかない子でした。その子に人としての道を教えるために、クラスに呼びかけました。皆で良いことをほめよう、良いことをしよう、子供達がお互いを認め合うようにしよう。呼びかけると子供達はどんどん良いことを考えて競ってするようになり、特に荒れていたその子は、一番良くいろいろなことをするようになり、皆にも認められ見違えるように明るくなりました。国語や算数を教える前に、人の道を教えたいと思っています。

## 足立 憲昭

若い人達のために私の人生を振り返って話したいと思います。26歳でICに係りました。その当時は立派な人達の中で何ができるのかなと考えてきました。その後夢中になって仕事をしました。3500冊も本を読みました。今54歳になり、会社の内部統制のリーダーとなり、グループ129社をまとめる役を任せられました。家に帰って妻に報告すると、「お父さんがよく頑張ったからよ」と言ってくれました。企業の中では自殺や過労死が横行しています。このような悪い環境の中で大切なことはただ一つ、無私の心です。

自分のことよりは人のために働こう。いつかきっと大きなチャンスがやってくると思います。皆さん頑張ってください。

### イ・ジンナム（韓国） ワークショップ〈韓日のより良い関係のために〉で学んだこと

韓国と日本のチームが一つになって韓日の関係を良くしていくことを考えています。今回は時間が短く十分な話し合いまではできませんでしたが、ここで話合われた中で、次のことを決意しました。

1. この会議をきっかけとして今後も継続して活動していく
2. 韓国チーム、日本チーム、と別々に活動してきましたが、これからはもっと連携を取り、一つのチームとして韓日の問題に取り組んで行きたい

ここで私達の決意の表れとして、日本の歌「さくら」と韓国の歌「アリラン」を皆さんと共に歌いたいと思います。



日本の歌「さくら」と韓国の歌「アリラン」を歌う日韓の若者たち

### パン・ハンティン（台湾）

コンニチワ、今回日本に初めて来ました。初めて温泉というものに入りました。みんな裸でびっくりしました。そこには何人もの若いお母さん達が3、4歳の子供を連れて仲良くお風呂に入っていました。お母さん達がみんな子供をしっかり抱っこしている姿を見て感動しました。これが日本を支えるスピリットなのだ実感しました。私と母は一度もハグ（抱き合う）したことがありません。家へ帰ったら私もお母さんをハグしたいです。

### 関口 妙子

ライトハウスの園長、関口です。今回はマイクロバスをチャーターして総勢15人で参りました。保育者全員で参加できたことで保育の根源にある人との接し方をここで学ぶことが出来たと思います。



フルートを奏でる須藤さん

### 木本すみ子

昨日の文化の夕べで、須藤英治さんのフルートの演奏を聴いて下さったと思います。彼は無償の愛の人だと思います。ボランティアで必要な人達に音楽を届けています。ICの考えにも共鳴され、寄付もして下さいました。私の主人が古くからMRAのメンバーですが、私は今回が初めてです。いきなり入ってきても心が自然に開かれていきます。リュウ・レンジョーさんのお話に感動しました。自ら考える力を養っていければ、世界が良くなると思いました。

## カピラ・バンダラ (スリランカ)

ここでは沢山すばらしい話を聞きました。でも実際はどうだろうか、自分が本当にきちんと生きていだろうかと考えました。私は家内の気持が分かっていないことに気づきました。では日常生活はどのようにすれば良いのだろうかかと再び考えました。この会議に参加したことで、実際の生活につなげて行かなければいけないと思いました。

通訳ボランティアの皆さん (他にも柴田節子さん、西部恵子さんにお手伝いいただきました)

横山 直美 皆さんの話を聞きながら私自身の中にも変革が起っています。環境を守るため自転車通勤を始めます。

中島 信子 毎年参加していますが、今回は準備の会から係り会議を作っていく大変さを感じました。来年も参加したいと思います。

パメラ・ミシュラー 初めて参加し、横山先生の下で頑張りました。受け入れて頂き人間として成長できたと思います。対話が大切だと思いました。今日から心の通う対話をしたいと思いました。

糀谷 章一 2回目の参加です。今回は少し慣れました。韓国語→英語→日本語のリレー通訳を初めて体験しました。時間がかかるが大切なことだと思いました。



(左から)横山さん、中島さん、パメラさん、糀谷さん

会議の最後に榊たか子副会長のことばをもって閉会となりました。

「日本はアジアの灯台に」と言ったフランク・ブックマン博士 (MRA の創始者) の言葉を今も忘れません。日本を、世界を平和にするために努力しましょう。一人一人がこの会を盛り上げ、一人でも多くの会員を増やしましょう。将来のアジアの平和のために、ひいては世界の平和のために仲良く助け合って行きましょう。

## 海外代表メンバー小田原・箱根地区の小学校を訪問



昇殿参拝後 神職と共に (二宮神社)

中山 啓介

海外代表メンバーのアルワジンさん (インドネシア)、ジースンさん (韓国)、ハンティンさん、リュウ・レンジョー&グレースさん夫妻と娘のシャオユンさん (4名台湾)、ビリヤさん (カンボジア)、ツロンさん (ベトナム) の8名は、アクション・フォー・ライフ (AfL) の初年度 (1992年) から始まり、今年で5回目を数える小田原・箱根地区の学校訪問を行いました。

## 芦子小学校での“ふれあい”

芦子小学校での交流会では、事前に学校側で用意された世界地図と出身国の国旗を背に、メンバー8名は各自の自己紹介をしました。それぞれの趣向を凝らしたクイズ形式の質問にも、生徒たちは積極的に応じ、時には地図の前で立ち往生する姿も見受けられましたが、直接触れ合うことの楽しさとワクワク感を十二分に実感しているようでした。次いでメンバーによる“いじめ”をテーマにした寸劇形式による体験の発表をした後、静かに自分の中の心（エンジェルの声）に耳を傾ける時間を持ちました。そして聞こえてきた心（エンジェルの声）を発表する場面では、自分と友達との関係、兄弟姉妹との関係、親との関係で気づいたことを生徒たちが進んで発表してくれました。最後に4年生の主任の先生が、エンジェルの声に耳を傾けることの大切さを強調されて幕を閉じました。

## 報徳二宮神社訪問

午後は、小田原の生んだ近世の偉人二宮尊徳を祀る報徳二宮神社を訪問しました。二宮神社の草山宮司とMRA（IC）小田原サークルの二宮代表とは永年懇意の関係にあることから、今年も特別にお願いして実現したものです。海外の青年たちにとっては日本文化の象徴の一つである神社に触れ、そこで神として祀られる尊徳の人と思想について少しでも理解してもらうことは、きっと有益な体験となったことと思います。



マオリ族の歌と踊りで盛り上がる（芦子小）

## 三の丸小学校

翌21日（木）の午前中は、小田原市立三の丸小学校を昨年に続いて訪問しました。生徒が、ハーモニーホールでメンバーを歓迎、交流会の後、一行は分かれてクラス毎に昼食をとり、短時間ながらも交流を楽しみました。

## 足柄小での英語ゲーム

午後には、小田原市立足柄小学校を初めて訪問しました。この小学校は、近頃社会的関心の高い英語によるコミュニケーション能力向上による国際理解をめざす研究指定校でした。ここでの交流会は、ケニアで生まれた、ディズニーのミュージカル“ライオンキング”の主題歌で始まり、自己紹介などの後、学校側の希望で全員参加の簡単な英語ゲームを行いました。さすが研究指定校だけあって、生徒一人ひとりが一所懸命に英語ゲームに参加していたのが印象的でした。

小田原でのホストファミリー7家族との合同交流懇親会も開かれました。今回のメンバーのためのホストファミリーは、新たに引き受けてくれた3家



青年たちの国を当てるゲームに熱心に参加（三の丸小）



一人ひとり英語でチャレンジ（足柄小）

族を含め、地元を中心とした7家族でした。MRA (IC) 小田原サークルが主催者となり交流懇親会が開かれ、小田原の方々の歓迎に対して、メンバー8名はホストファミリーへの感謝とAfLの活動の紹介を行いました。

### 箱根町の湯本小学校

翌日の22日(金)には、午前中、箱根町の湯本小学校を訪問しました。交流会で同校の石田校長先生は、生徒の中に分け入って、各国の挨拶語を反復しつつ、今日の交流会の意義を改めて生徒たちの心に印象づけられました。



青年たちが挨拶した言葉について語る石田校長(湯本小)

### 国府津小学校

小田原市の東端に当る国府津小学校は鈴木恒美先生が勤められる学校で、昨年に続いて2回目の訪問です。到着後直ちに生徒たちが待つ体育館に通され、手製の国旗と英語の歌での手厚い歓迎を受けて交流会がスタートしました。2年生3クラスと6年生3クラス約210名の大合同交流会となった今回、無事に交流の手応えを感じることができました。終了後の懇談の席で、永田校長先生が「海外代表メンバーの青年たちがそれぞれの人生に対する確信を英語で語るのを聴いたが、日本人の青年が自分の人生についてこれだけの確信をもって英語で語れるだろうか」と実感を込めて語られたのが印象に残りました。

なお、これらの学校訪問の様子は、神奈川テレビの「ニュースよこはま」で取り上げられた他、地元の神静民報の1面や神奈川新聞の西湘欄に写真入で載り、広く県民に伝えられました。



生徒たちは手づくりの国旗で歓迎(国府津小)



給食を食べながら交流を深めました(杉並区立沓掛小学校)



### 東京でも大学および小学校への訪問が行われました。

国際キリスト教大学(ICU)を訪問、副学長の森本先生と懇談(左から)ツロンさん、ピリヤさん、アルワジンさん、森本先生、ヒジンさん、ハンティンさん、ジースンさん、シャオユンさん、長野氏

## ◆◆◆ IC ニュース ◆◆◆

### ■ IC 交流会 「地球を歩く・木を植える」 中溪氏講演

世田谷の IC ハウスにて、去る 5 月 12 日(土)に中溪宏一さんをお迎えして IC 交流会が開かれました。商社勤務の後、世界を放浪中、南アで、慰霊のため 20 世紀の世界の全戦没者数と同じ一億本の木を植えるべく旅をするポール・コールマン氏(英国)に出会って感動。彼と共に植林をしながらジンバブエ等を回った後、現在は日本の各地で木を植える旅を続ける中溪さんから「人と人のネットワークの大切さ、草の根の活動から社会を変えていける」という多くの興味深い具体例を分かり易くお話いただきました。

### ■ 第 4 回日中韓青年フォーラム

8 月 16 日(木)から 21 日(火)まで、韓国の IC/MRA 協会の主催で開催される日中韓の大学生による第 4 回東北アジア青年フォーラムには、日本から在日コリアン 3 名を含む 18 名の大学生が参加します。皆熱心に準備に取り組んでおりますので、若者たちへのご支援を引き続きお願い致します。

### ■ 中国国際交流協会代表団来日予定

本年は、日中国交回復 35 周年に当たります。昨年は、日本からの第 3 回 IC 訪中団グループが北京、河南省等を訪問し、各地で暖かくお迎え頂きました。今年は 9 月から 10 月の間に中国国際交流協会の代表団をお招きする予定です。今回も IC 協会の会員の皆様を初め多くの方々に来て頂き、心の通い合う交流を重ねたいと思います。

### ■ 日本とインドの共催による IC 国際会議の開催 (参加者募集中)

本年 11 月 23 日(金)から 27 日(火)まで、インドのマハラシュトラ州・パンチガーニにある IC センター「アジア・プラトール」で、日本とインドの共催による IC 国際会議が開催されます。テーマは、「グローバル化する世界におけるアジアの役割—新しいリーダーシップに求められる信頼と高潔さ」です。詳細をお知りになりたい方は IC 事務局までご連絡下さい。

### 訃報

弊協会の役員として長年にわたり IC (旧 MRA) で活躍された柳澤錬造氏が、去る 6 月 10 日に逝去されました。(享年 88 歳)。石川島重工の労働組合の委員長をされていた時に、MRA に出会われ、家庭での変化を皮切りに、組合運動の中でも、又、戦後のアジアの国々の人々との関係においても、MRA の精神で多くの融和をもたらされました。参議院議員としても活躍されましたが、「国会の良心」とも評されていました。

ここに心よりご冥福をお祈りいたします。

### 編集後記

今号では 6 月に開催した IC 国際会議の様子を中心に報告させて頂きました。諸事情によりご参加頂けなかった方々に内容の一部でも伝われば幸いに存じます。

尚、本機関誌に関しましてご意見等がございましたら、国際 IC 日本協会事務局までお寄せ下さいますようお願い申し上げます。

編集企画委員：高橋久子、中嶋邦子、長野清志 編集担当：海老原真美